第三節　災害の記録

この島は比較的に災害の少ない土地柄ではあるが、江戸時代二六〇年の間には、洪水・旱魃・地震・暴風雨等の災害に何回か見舞われている。ことに現今でも全国有数の降雨量の少ない地域だけに、旱魃による水不足を一度ならず経験している。明治以前の飢饉が、とくに農民に打撃を与えたのは、封建制下閉鎖的、孤立的経済体制と交通運輸の不便に原因していることはいうまでもない。

耕地面積の狭小なこの島は、米麦、雑穀、甘藷等を主食として辛うじて自給できたのであったから、平時でも年貢米皆済のためには他国米を買い増して納めざるを得ないような状況であった。そのため飢饉年の農民の困窮は今日からは想像もできない惨状を呈したことと推察される。（とくに飢饉年には高松藩など、「津留め」といって、米の他地方への移出を禁止した）

一、寛永十九年（一六四二）

いわゆる「寛永の飢饉」と特記せられるほど全国的な大飢饉であったけれども、この島のこれに関する資料はない。あるいは漁撈の最盛期であったから、凶作も難なく凌げたのかも知れない。

一、正保元年（一六四四）

八月一日夜一二時ごろから降雨、二日夜六時ごろまでつづいて、全島大洪水に見舞われた。

一、慶安四年（一六五一）

大阪船奉行、同東西町奉行支配のとき、旱魃による飢饉、加子浦であったため、とくに夫食米・種米として大阪の蔵から米千石を給付せられた。

一、承応三年（一六五四）
島内村々飢饉。前記奉行に願って草加部村では、大阪御蔵から三五〇石三斗九合の拝借米をし、寛文五年（一六六五）までに返済した。

一、寛文五―六年（一六六五―六六）
二年つづきの旱魃で、飢人が多く出たので大阪御蔵から拝借米をした。

一、延宝二年（一六七四）
洪水のため、苗羽奥の内池・安田古郷池・西城の小坪池・尺越池・小田松池等が決潰した。

一、延宝三年（一六七五）
島内飢人総数二、一九五人に対し、大阪船奉行より夫食米拝借、男は一人一日三合ずつ女は二合ずつ、そして高持百姓は三〇日分、無高百姓は二〇日分。返済期限は翌四年一一月。

一、延宝九年（天和元年＝一六八一）
二月、島中飢饉、大阪代官松村吉左衛門より、代官の口米・役料米のうちから飢人の拝借米をした。返納は同年一一月。

一、貞享四年（一六八七）
大雨のため西城村のやしもち川・別当川・いせき川・堂の上川・片城川・小坪池・苗羽村の奥の内池・安田村の古郷池・縄手池・木庄池等が破損した。

一、元禄元年（一六八八）

大雨のため別当川石堤が破損した。

一、元禄二年（一六八九）
大雨のため、下別当川東手川堤が破損した。

一、元禄十一年（一六九八）
安田村に飢人多く出たため、この年の年貢四分二厘減額を許された。

一、元禄十六年（一七〇三）
坂手村困窮のため、飢扶持給付を代官へ願い出た。

一、宝永四年（一七〇七）
十月、南海・東海地方は大地震、大阪では大津波が起こり、島でも大風波が襲い、苗羽村の上り浜塩浜・宮脇塩浜・安田村の沖塩浜・大新開塩浜、西城村の五軒畔（くら）塩浜・孫太夫畔塩浜・木場塩浜の堤がそれぞれ数か所破損した。十一月には富士山が噴火した。

一、宝永六年（一七〇九）
大雨で別当川堤が決潰した。

一、享保二年（一七一七）
安田村困窮のため、総百姓の名で同村富農から年貢用銀四貫七五〇匁を借用した。

一、享保三―五年（一七一八―一七二〇）
旱魃。

一、享保十四年（一七二九）
大風波のため、農作物被害大。安田村の大新開、西城村の孫太夫畔浜・木場浜・五軒畔浜、苗羽村の上り

浜等塩浜の堤が破損した。

一、享保十五―十六年（一七三〇―三一）

大水のため別当川の石堤が破損した。

一、享保十七―十八年（一七三二―三三）

中国・四国・九州に稲作蝗害が蔓延した。この島も同様で、九月飢人調査役人が島内を巡視した。とくに本年冬より翌十八年春にかけて島内の飢饉が甚だしかったので、時の支配者高松藩から全島合わせて米に直して六三四石六斗六升四合の夫食米を借用した。このうち代銀（三八貫余）は元文元年（一七三六）より一〇か年賦、米は一〇か年ないし七か年賦で返納のこととなり、草加部村分は一〇貫六二八匁で、一〇か年賦で延享二年（一七四五）までに完済した。なお、将来の飢饉に備えて、この年草加部村庄屋屋敷内に貯蔵用籾蔵を建てた。

一、元文二年（一七三七）

大水で別当川石堤が破損した。

一、元文四年（一七三九）

春は、上村・安田村・堀越村に飢人多く出たので、高松藩から夫食米九二五匁七分九厘借用し、翌五年より三か年賦で返済した。

八月、大水で別当川石堤が破損し、高汐のため苗羽村の上り浜・宮脇浜、安田村の沖浜・大新開、西城村の五軒畔浜・孫太夫畔浜・木場浜等各塩浜の堰堤が破損した。

一、寛保二年（一七四二）

七月、大風波のため、苗羽村宮脇浜・安田村沖浜、西城村五軒畔浜等塩浜の堤が破損した。

一、宝暦七年（一七五七）

大雨洪水。

一、宝暦十二年（一七六二）

八月、大雨洪水。とくに福田村の被害大で字上庄で家一二軒流失、死者一五人、馬が多く流失したので、世に「馬の洪水」といった。午年であったからでもあろう。「今流れ」という地名もこのときからできた。

一、宝暦十三年（一七六三）

安田村困窮して、年貢用銀二貫目を総百姓の名で、村内の富農から借りた。

一、明和八年（一七七一）

六月、旱魃。

一、安永二年（一七七三）

坂手村は昨年来の麦不作のため、御林仲人石山の立木払下げを倉敷代官へ願い出て許された。

一、寛政二年（一七九〇）

旱魃。

一、寛政四年（一七九二）

暴風、安田村だけでも四、五〇軒の家屋が倒壊した。

一、寛政九年（一七九七）

旱魃のため秋作が不熟であった。

一、文化三年（一八〇六）

六月島内旱魃で困窮したので、七月草加部村庄屋菅茂次郎、橘村年寄広瀬作太夫らは、島の最高峯星ケ城

峯の樹木を守って旱魃を防ぐため、西峯に阿豆枳(あづき)神社、東峯に豊受大神宮を再興した。

一、文政六年（一八二三）

旱魃。

一、天保五年（一八三四）

暴風による田畑の被害大であった。

一、天保七―八年（一八三六―三七）

天保四年（一八三三）奥羽地方にはじまる飢饉は、同七、八年に至って全国的な天候異変で、小豆島もその例外ではなく、七年四月から八月まで雨天つづきで田方は大損毛をした。伊予松山藩の預り地であった草加部・福田・大部三か村は、一二月同藩に対して、年貢全部を石代納にし、しかもその銀納値段の減額を願い出た。しかし銀納値段の減額は許されたが、年貢全部の銀納は聞きとどけられなかった。

当時の小豆島の困窮ぶりは、たとえば草加部村のうち安田村の場合など、平時相当の高持百姓でさえ、年貢上納が不可能で、富農から借銀をしたもの一〇軒を数えたほどであった。いわんや小作人の窮乏は更に甚だしく、代表を選んで地主に対して地子の引下げを願い出て田作は二引き（二分引きか）、畑作は難渋者ごとに適当な減額をすることになったけれども、八年八月には更に頼みこんで米一石八〇匁余の相場を、六〇匁、六七匁の二段階に分けて、値段を下げてもらった。このとき地主一〇名に対して減額を願った小作人の数は五四名であったから、安田村の家数一三五軒のうち小作人は約四〇パーセントの多数であった。

一、弘化四年（一八四七）

暴風雨で、上村、下村の被害が最も大であった。

一、嘉永三年（一八五〇）

凶作であった。

一、嘉永六年（一八五三）

六月から九月にかけて大旱魃、これを丑年の旱魃と呼んでいる。

一、安政元年（一八五四）

十一月、諸国に地震が起こり、東海地方の被害が最も大であったが、この島でも四日間震動がつづき人心恟々として竹藪などへ避難小屋を建てて過ごしたほどであった。

翌二年十月には江戸で大地震があり倒壊家屋数万戸、市中の大半が火災を起こした。これらを「安政の大地震」といって後世に語りつがれた。

一、万延元年（一八六〇）

田畑不作のため、草加部村・福田村等天領三か村は代官に対し、年貢の銀納分の減額を願い出た。

一、文久元年（一八六一）

前年につづく田畑不作のため、草加部村・福田村等天領では、郷中貯蔵の穀物の拝借を願い出て、聞きとどけられた。すなわち

○草加部村　人数八、七三四人

内五、一五〇人　村役人および生計可能のもの

残三、五八四人　貯穀拝借したきもの

所要の籾二七九石

このうち男一、〇六六人で三月末から四月末まで三一日分一人籾四合ずつ、女および老人、子供二、五一八人、同日数一人籾二合ずつ。

○福田村　人数一、〇八二人
内七五九人　村役人および生計可能のもの
残三二三人　貯穀拝借したきもの
所要の籾二五石九斗八升

このうち男一一〇人、女および老人子供二二三人で一人当たり支給籾は草加部村同様である。

これでみると、草加部村で総人口八、七〇〇人余に対し約四一パーセント、福田村では人口に対し約二九パーセントの男女老幼が困窮人ということで、幕末期各村の貧窮度が理解できる。

一、慶応二年（一八六六）
旱魃と米価暴騰のため島中が困惑した。

一、慶応三年（一八六七）
十一月、草加部村・福田村等は相つぐ旱魃のため、年貢の米納を止めて、全部銀納とするよう代官へ願い出た。

近代に入っても旱魃・暴風雨等の災害は止むことはなかったけれども、飢餓に苦しむというようなことはしだいに減っていった。その代わり旧幕時代の鎖国を廃して開国したことにより、ペスト、コレラ等の強烈な伝染性の病菌が輸入されることになった。

一、明治二年（一八六九）
十一月五日、地震以後二、三日小震止まず。

一、明治四年（一八七一）
五月十八日、大雨、安田古郷池決壊、田畑の被害大であった。

一、明治五年（一八七二）
西村竹生に腸チブス大流行。

一、明治六年（一八七三）
牛疫が島内に流行した。

一、明治七年（一八七四）
水木に天然痘が流行し死者多数を出した。

一、明治十三年（一八八〇）
七月二十五日から九月十六日まで五三日間降雨なく島内旱魃。
九月十六日、暴風、海上大時化。

一、明治十四年（一八八一）
七月十六日以後六十六日間降雨なく旱魃。

一、明治十五年（一八八二）
八月五日、暴風、海上大時化。

一、明治十六年（一八八三）
七月二十一日より九月十七日まで五八日間降雨なし。

一、明治十七年（一八八四）
八月二十六日、暴風、海上大時化。

一、明治十八年（一八八五）
七月一日、大雨洪水、被害大。

一、明治十九年（一八八六）
六月十八日より八月二十七日まで七〇日間降雨なく旱魃。
九月十日、暴風、海上大時化。
九月十七日、重ねて暴風高潮。
一、明治二十一年（一八八八）
七月二十二日、暴風雨。
九月十一日、　同。
一、明治二十二年（一八八九）
八月十八日・十九日、暴風雨。
九月十一日・十二日、暴風雨。
一、明治二十三年（一八九〇）
四月十一日より五月十三日まで二三日間雨降りつづき晴天六日。麦作に大被害をうけた。
七月三日より九月一日まで約六〇日間降雨なく旱魃。
九月二十九日、多度津に発生したコレラが全県下に拡がり患者五五〇名に達した。十月末病勢は衰えた。
十月六日、暴風雨。
一、明治二十四年（一八九一）
八月十六日、暴風、海上大時化。
九月十四日、暴風、海上大時化。
十月二十八日、濃尾大地震、県下でも強震があった。

一、明治二十五年（一八九二）
七月二十三日、暴風雨。
一、明治二十六年（一八九三）
六月二十四日より八月十七日まで旱魃。
八月十五日全島連合大焚火雨乞いをした。渕崎皇踏山・吉野段山・豊島・四方指・星ヶ城の五か所、安田などはとくに岡の山にて各戸麦わらを持参して焚いた。十七日になって漸く降雨、ために麦作は一〇年来の豊作であった。
この年赤痢が流行した。
一、明治二十七年（一八九四）
六月二十四日より七月二十二日まで降雨なく、日射しとくに烈しかったので、七月十六日昨年通り各村連合大焚火雨乞いをした。
九月十日、暴風雨。
この年も赤痢が流行した。
一、明治二十八年（一八九五）
七月二十四日、暴風雨。
一、明治二十九年（一八九六）
二月四日、大雪が降った。
七月二十一日、五〇年来の豪雨。
八月十八日、暴風雨。新築落成の内海の小豆島第二高等小学校校舎倒壊し、極楽寺を仮校舎にした。また

草壁の島醤油会社、肥土山舞台等被害大で、島内倒壊家屋一〇〇余戸に及んだ。
八月三十日、本年三度目の暴風雨。
この年西村などに天然痘、赤痢患者が多く出た。

一、明治三十年（一八九七）
八月十三日、県下に赤痢患者が多発したので、各郡市に検疫委員をおいた。
この年稲作に蝗害が大であった。
また、近年の赤痢等流行病のため内海各村で隔離病舎を建てはじめた。
明治二十九年には苗羽村が、三十一年には安田村が、三十三年一月には坂手村が建てた。

一、明治三十二年（一八九九）
八月十五日、暴風、海上大時化。
八月二十八日、暴風雨、倒壊家屋が多かった。

一、明治三十三年（一九〇〇）
昨年末より神戸・大阪にペストが流行したので、五月十五日香川県はその予防のため大阪港より出航の船に対し検疫を開始し、坂手港も検疫港に指定された。しかし島内にペスト患者はでなかった。
八月十九日、暴風雨、被害大であった。

一、明治三十五年（一九〇二）
八月九日、県下にコレラ患者が発生したので草壁港には土庄港とともに船舶検疫事務所がおかれた。六月二十二日初発以来コレラ患者は八月末現在県下総数一、三一五名、死亡七七二名に達し、島内にも大流行し、西村では竹生に仮の隔離病舎を建てたほどであった。十一月末ようやく終焉したが、県下の死者は一、七八

三名に達した。

一、明治三十六年（一九〇三）
五月四日、十二日、暴風雨。

一、明治三十七年（一九〇四）
稲の出穂前に旱魃。

一、明治三十八年（一九〇五）
六月、県下にペスト流行、五月二十日初発以来患者三四名。死者二二名。幸い島内に流行はみなかった。

一、明治四十年（一九〇七）
二月十一日、大雪、積雪一尺以上、神懸山中では一尺五寸以上であった。
五月十七日、暴風雨、農作物被害大。
七月十八日、暴風雨、被害大。

一、明治四十一年（一九〇八）
五月四日、暴風雨。
八月―十一月　竹生に赤痢患者が多くでた。
この年また牛疫が流行して、本島がもっとも甚だしかった。

一、明治四十四年（一九一一）
六月十九日、暴風雨。農作物とくに桃・林檎の落果が甚だしかった。
八月十五日、暴風。
年末から翌年にかけて、西村で痳疹が大流行した。

一、明治四十五年（大正元年＝一九一二）
四月十九日、空豆大の雹が降り、農作物の被害大。屋根瓦・ガラス戸など多く破損した。
八月二十四日、暴風雨。とくに大部以西が被害甚だしかった。
なお、この年春から梅雨季にかけ雨量甚だ少なく、農作物の被害大であった。
一、大正二年（一九一三）
七月四日から八月十八日まで三五日間降雨なく、日射猛烈で稲作、甘藷に害が多かった。
一、大正三年（一九一四）
七月十三日から八月二十三日まで四〇日間降雨なく、前年同様日射強く稲作・甘藷共に被害大であった。
一、大正四年（一九一五）
八月五日、弘化年間以来の暴風雨大洪水であった。
九月八日、暴風、海上大時化。西村、堀越等の海岸に大損傷をうけた。
一、大正五年（一九一六）
十一月十三日午前一時三〇分ごろ、坂手沖で第一艦隊所属第一水雷戦第四号艇のガソリン爆発。死者二、重傷六、軽傷二〇名をだし、坂手港はごった返した。
一、大正七年（一九一八）
八月二十九日―三十日県下暴風雨。北浦、渕崎で死者八名、負傷者多く、内海地区でも楊柳橋・大川橋・西村久徳の橋・神懸橋・遊仙橋・青木橋・福田村の伊豆川橋・森庄川橋が流失した。
九月十四日、暴風雨。

この年、スペイン風邪という流行性感冒が全国的に大流行し、死者多く、島内でも休校する学校が多かった。
一、大正九年（一九二〇）
八月二十四日、草壁港にコレラ発生。そのため二十九日まで漁撈・水泳・海水利用が禁止されたが、大事には至らなかった。
一、大正十年（一九二一）
六月十七日、暴風雨。
一、大正十二年（一九二三）
九月一日の関東大震災の報に愕然とした。しかし、島には微震もなかった。
一、大正十三年（一九二四）
六月初旬から八月二十一日まで旱魃。農作物の被害大であった。
九月十二日、暴風雨。清見寺境内のバラック建て小豆島中学校校舎の屋根が大破した。
二十九日、暴風雨。
一、大正十四年（一九二五）
四月一日、星ヶ城附近より出火、山林六〇ヘクタールを焼失。近来稀な大火であった。
一、大正十五年（昭和元年＝一九二六）
七月六日、集中豪雨。
一、昭和二年（一九二七）
昨年末より本年はじめにかけ、流行性感冒が大流行した。

三月七日、丹後地方大地震で島も微震を感じた。

一、昭和三年（一九二八）

二月二日、神懸山で火災が起こり山林約二〇ヘクタールを焼失した。

同月十一日、島内稀な大雪が降った。

九月十一日、集中豪雨。

一、昭和四年（一九二九）

四月、苗羽、安田両村に腸チブスが流行し伝染病棟を増築したほどであった。

九月、旱魃。醤油醸造家で水不足に困惑した。

一、昭和五年（一九三〇）

一月十一日―十二日、大降雪。

八月、旱魃。

九月八日、上村金比羅山より出火、約一ヘクタール焼失。

九月九日、苗羽村八幡座映写室より出火、観客数名が負傷した。

一、昭和六年（一九三一）

二月十日、夜来の大積雪、約二〇センチに達した。

九月十八日暴風雨、島一帯被害大。とくに福田村に集中豪雨、山津波が起こった。死者五、重軽傷者一五、家屋流失一七戸、倒壊および半壊四五戸、橋流失七、田埋没一三町、畑六町、山林一〇町、宅地二町、道路、堤防、石切場等の被害大であった。

一、昭和七年（一九三二）

二月十九日、小豆島女学校寄宿舎火災

一、昭和八年（一九三三）

八月、旱魃。農作物は四〇年来の不作で稲作は収穫皆無の田地三〇〇町歩に及んだ。

一、昭和九年（一九三四）

五月十三日から八月にかけて降雨ほとんどなく旱魃がつづいた。

九月二十一日、室戸台風。内海地区の家屋、農作物等被害大であった。とくに坂手では家屋倒壊五戸、埋立、防波堤一部破壊、漁船破壊三、石炭満載船沈没、曲芸団運送船沈没。草壁町では家屋全壊九戸、半壊九戸等被害が最も大であった。

この台風はまた大阪、京都、神戸等全関西を襲ったので、醤油業者の大阪の取引先六、〇〇〇軒余のうち一、〇〇〇軒が被災し貯蔵醤油を台なしにしたため、売掛代金の回収不能となり、仕込季節を迎えて原料の仕入れに支障をきたす向きも多かった。

一、昭和十年（一九三五）

六月二十九日、集中豪雨。

七月三日、午前一時ごろ、三都村釈迦ヶ鼻沖で、大阪商船別府航路みどり丸（一七二七トン）が濃霧のため大連汽船貨物船千山丸と衝突して沈没し、船客・乗員一六六名中死者七六名をだした。以後数日間、救護者援護、遺体の収容等で坂手村は混雑を極めた。

八月二十八日、暴風雨。とくに福田村の被害大で、防波堤が破壊された。

九月、麦の条斑病が全島に蔓延した。

一、昭和十一年（一九三六）

七月、麦の条斑病が猖獗した。
九月十一日、暴風雨。坂手小学校校舎が傾斜し、丸金醤油会社の煙突倒壊。内海地区倒壊家屋六戸、納屋等の倒壊一四軒を数えた。
一、昭和十二年（一九三七）
五月十八日、坂手洞雲山東南部山林より出火、約二〇ヘクタールを焼失した。
九月十日、暴風雨、島内被害大。
一、昭和十三年（一九三八）
九月四日、暴風雨。
一、昭和十四年（一九三九）
八月三日、旱魃甚だしく、各町村で雨乞い祈願をした。
一、昭和十五年（一九四〇）
一月二十四日、坂手村洞雲山山林より出火、連日燃えつづけて約一五〇ヘクタールを焼失した。近来稀な大山火事。
八月三日、堀越小豆島醤油会社が全焼した。
一、昭和十六年（一九四一）
八月十五日、暴風雨。
一、昭和十七年（一九四二）
九月二十日―二十一日、暴風雨。
十二月三十一日、午前十時五十分ごろ、土庄町小瀬沖で、内海汽船にしき丸（四二トン）が沈没し、現役

帰休兵を含めて六五名が死亡した。
一、昭和十八年（一九四三）
九月二十日、暴風雨。
一、昭和十九年（一九四四）
七月―八月、旱魃。農作物被害大。
一、昭和二十年（一九四五）
二月二十六日、大降雪。
今次大戦中の災害は全国的に前古未曽有のものであったし、島出身兵士の戦死戦傷等非常の数に達したが、島内の被災は少なく比較的安穏であった。しかし戦争末期ともなれば、生臭い事件もしばしば起こった。
七月八日、高松―小豆島間定期航路女神丸（一二〇トン）が高松沖で米機の機銃掃射を浴び、死者二〇名、重軽傷者多数をだした。
七月二十二日、島駐屯嵐部隊実地訓練用目標艦芙蓉丸が米機の機銃掃射をうけて死者九名をだした。
八月二日、嵐部隊芙蓉丸が磁気機雷にふれて六名が死亡した。
一、昭和二十一年（一九四六）
七月一日、県下にコレラ患者発生、坂手港附近の魚貝藻類の採取・水泳が禁止されたが、患者は発生しなかった。
一、昭和二十二年（一九四七）
一月四日、暴風雨。

七月九日、集中豪雨。

一、昭和二十三年（一九四八）

十月六日、豪雨。

一、昭和二十四年（一九四九）

七月三十日―三十一日、ヘスター台風が来襲した。

一、昭和二十五年（一九五〇）

九月三日、ジェーン台風来襲。

一、昭和二十六年（一九五一）

七月二日、ケート台風で集中豪雨。

十月十四日、ルース台風来襲。

一、昭和二十七年（一九五二）

六月十九日、ダイナ台風来襲。

七月三日、集中豪雨、内海町では水田冠水三ヘクタール、床下浸水一五、崖くずれ五、道路損壊一か所の被害があった。

七月十日、集中豪雨。

一、昭和二十八年（一九五三）

三月二十九日、春雪降り麦の被害大。

六月七日、台風二号来襲。

九月二十六日、台風三号来襲。

十一月十五日、坂手財産区有林仲人石山が火災で約六ヘクタール焼失した。

一、昭和二十九年（一九五四）

六月三十日、集中豪雨。

七月七日、集中豪雨。

八月十八日、台風五号来襲。東浦の被害が大で、福田港真珠母貝三万個を損失した。

九月十三日、台風一二号来襲。南部海岸の被害大で、家屋、工場の倒壊するもの多く、坂手港桟橋は全部沈没した。

九月二十五日、台風一五号来襲。

一、昭和三十一年（一九五六）

四月十三日、午後零時三〇分ごろ、岩谷眉毛山より出火、約一〇ヘクタールを焼失した。

八月、旱魃。水不足に苦しんだ。

十一月五日、福田しだ山丁場で落盤事故があり、石工三名死亡。

一、昭和三十二年（一九五七）

七月十八日、午前一時ごろ集中豪雨（降雨量一〇八ミリ）。町内崖崩れ二か所。

十一月、流行性感冒猖獗し、小中学校の臨時休校するところが多かった。

一、昭和三十三年（一九五八）

一月二十六日、暴風。

八月二十四日―二十五日、台風一四号来襲。

一、昭和三十四年（一九五九）

九月二十六日、台風一五号来襲（伊勢湾台風）。

一、昭和三十五年（一九六〇）

五月一日―九月三十日、町内農作物被害のため野生猿の捕獲方（坂手六、田浦四、橋・岩谷六、平間二〇計三六頭）を二月申請し、右期間中に捕獲した。

七月八日、集中豪雨（一二一ミリ）。島内被害は水田冠水二六ヘクタール、山崩れ八か所。

八月二十九日　台風一六号来襲。オリーブの被害大、家屋・道路・船舶・山崩れ等の被害も大であった。

一、昭和三十六年（一九六一）

八月十六日、渇水のため、内海町は時間給水をはじめた。

九月三日―四日　台風一七号による集中豪雨。別当川堰堤下部が流失、道路三か所、橋一か所、水田冠水一五ヘクタール、床下浸水は苗羽・安田・草壁で四九四戸に達した。

九月十六日、台風一八号（第二室戸台風）。町内の損害、河川二六か所、海岸二、道路二一・橋四、港湾（坂手・内海）七か所。とくに神懸線被害大で、絢海橋破壊、内海ダムの一部が決潰した。

十月二十六日―二十七日、集中豪雨。室生峠が埋まり、西村地区各所に地すべり、山崩れがあり、神懸線もいよいよ破壊され、安田では三五郎池の一部決潰、橋―福田線で数か所山崩れがあって不通となる。全壊家屋は安田六、草壁三、苗羽二、坂手一で計一三戸、半壊は福田を含めて三六戸、床下浸水一、七〇〇戸に及んで、内海町には災害救助法が適用され、十月二十九日から十一月五日まで、陸上自衛隊善通寺駐屯部隊二一〇名が来島、災害復旧にあたることになったが、十月三十一日には増援部隊八二名が来島して安田大川の堤防修理に従事した。

一、昭和三十七年（一九六二）

六月九日―十日、集中豪雨。

六月十三日、集中豪雨。

一、昭和三十八年（一九六三）

四月―六月、長雨で農作物の被害大。

五月―六月、福田地区中心に集団赤痢が発生した。

一、昭和三十九年（一九六四）

八月八日、午後七時ごろ、寒霞溪納涼バスが転落して死者二、重軽傷者七一名をだした。

九月二十四日、台風二〇号来襲。坂手・草壁両桟橋が中破した。

一、昭和四十年（一九六五）

八月二十九日、当浜で山火事あり、約一〇ヘクタールを焼失した。

九月十日、台風二三号来襲。町被害は河川一二か所、道路六か所、橋四か所損壊、水田埋没五ヘクタール、冠水一一ヘクタール、畑流失一六ヘクタールに及んだが、とくに福田の被害は大で、森庄川の明神橋から玉姫橋・森庄橋間の左岸一帯が決潰、濁流は中場部落一帯に押しよせ一瞬にして泥海となり、三〇数戸が床上浸水した。家屋倒壊三、八幡宮の被害も大であった。

九月十七日、台風二四号による集中豪雨。

一、昭和四十一年（一九六六）

二月中旬より集団風邪流行し、苗羽・安田・福田各小学校が一時休校した。

一、昭和四十二年（一九六七）

五月二十一日、岩谷県道で、尼崎仏教婦人会員乗車の帝産バスが転落、重軽傷四九名をだした。

八月、旱魃、内海町全域が渇水、たばこ耕作は二〇パーセント減となった。

一、昭和四十三年（一九六八）

二月十五日、大雪降り、農作物の被害大。

九月二十五日、台風一九号来襲。集中豪雨。

一、昭和四十四年（一九六九）

四月二十五日、町内各所に毒蛾が多発したため防除を始めた。

七月八日以後四〇日間降雨なく、水不足になやんだ。

一、昭和四十五年（一九七〇）

一月、前年につづく旱天で水不足に苦しんだ。

八月十四日、台風一〇号来襲、橘―当浜間県道に崖くずれがあった。農作物の被害も大であった。

参考書

小豆郡誌　小豆島九ヶ村明細帳